琉球大学学術リポジトリ

社会参画の資質・能力の基礎を培う授業づくり：社会科における振り返りやまとめの充実を通して

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学大学院教育学研究科 公開日: 2018-07-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 熱田, 脩 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/41616

社会参画の資質・能力の基礎を培う授業づくり
ー社会科における振り返りやまとめの充実を通してー

熱田 脩

琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻・中城村立中城南小学校

1　はじめに

豊かな自然と独自の文化・歴史が受け継がれている沖縄県。観光が主幹産業に位置づき，国内外からの入域観光客数も右肩上がりで好印象のイメージが持たれている一方，貧困，不登校，いじめ，子どもの学力，夜型社会，基地問題など多くの課題も山積している。これらの問題は，複雑に絡み合った社会的・政治的な状況の中で生まれたものが多く，一朝一夕に解決できるものではない。

しかし，それらの問題を乗り越え，持続可能な社会を実現するには，未来の担い手となる子どもたちが現代社会の問題を自分事としてとらえ，多様な人々と協働し，新たな価値観や行動を生み出しながら解決できる資質・能力が求められている。

教育基本法第２条３号は，教育の目標の１つとして「（中略）公共の精神に基づき，主体的に社会の形成に参画し，その発展に寄与する態度を養うこと」と記され，平成 29 年３月に改訂された学習指導要領・社会科の目標は「（中略）主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎」を育成すると示されている。これらのことから，社会の形成に参画する力と公民としての資質・能力の基礎は一体の関係であることがわかり，社会科の究極のねらいである公民としての資質・能力の基礎の中核は，社会に参画する力の基礎と言えるだろう。

これまで筆者の実践を振り返ると，興味・関心を高めるような身近な題材を用いたり，教材を開発したりすることで，子どもたちが意欲的に学習に取り組むなど一定の成果はあったと思われる。しかし，社会認識を深め，社会的事象を自分事としてとらえながら，実生活や実社会に関わろうとする意欲や態度を醸成することができなかった。社会科を学ぶことは社会を知ることであり，その社会を創るのは主権者である私たち国民である。そのため，筆者は学びと生活を結びつけ（知識），当事者意識を高めながら（意識），学んだことを実生活にいかそうとする力（行動力）その３つを総合して「社会に参画する資質・能力」と捉え，社会科の授業を中核としながら培っていくことが重要だと考える。

2　研究の目的

本研究は，社会参画の資質・能力の基礎を培う小学校社会科の授業づくりを提案し，その効果を検証することである。その手立てとして，振り返りやまとめを充実させることで，当事者意識を醸成し，社会へのかかわり方を選択・判断できるような授業改善を試みる。

3　先行研究

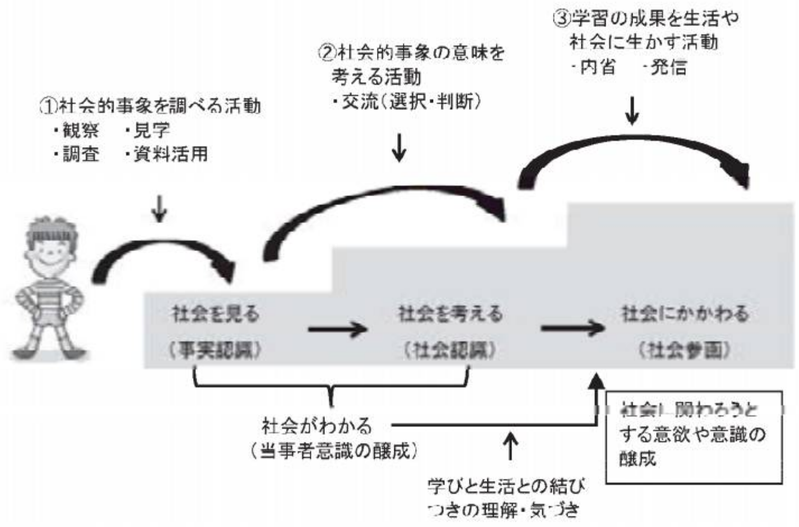
（1）社会参画の資質・能力の基礎

北（2012）は，社会参画の資質・能力の基礎について①社会的事象を自分事として受けとめ，理解すること②社会の課題をどう解決したらよいかを考え，より良い知恵を出すこと③よりよい社会づくりのために積極的に行動すること，の三点にまとめている。

（２）社会参画の資質・能力を培う授業構成

社会参画の資質・能力の基礎を身につけ，発揮できるようにするための条件について，北（2014）は図１のように①社会的な事象や事実を調べる活動（事実認識）→②調べてきたことをもとに考える活動（社会認識）→③生活や社会に生かす活動（社会参画）の段階を示している。

（図1）北（2012）を基に、筆者が加筆・修正した「社会参画の資質・能力の基礎を培う授業段階モデル」



唐木(2010)は，「社会参画を志向する社会科授業」として①科学的社会認識の育成を目指す社会科授業→②意思決定能力の育成を目指す社会科授業→③社会的実践力の育成を目指す社会科授業の３つにまとめ，①～③の順に授業を発展させることを提案している。

両氏の論から共通することは，調査・見学などの調べ活動を通して，社会認識（事実的認識や価値的認識）を子どもに身につけさせること，調べたことをもとに再思考（選択・判断）する場を設定すること，学んだことを実生活へと結びつける（発信・行動）ことである。この論を単元構成に位置付けながら，社会に参画する資質・能力の基礎を培う授業づくりを進めていく。

（３）社会参画の資質・能力を育成する授業実践事例

①板垣（2007，2008，2009）は，３年間を通じて社会に参画する力を育むために，その土台となる知識や概念，技能などを獲得させつつ協働的な学び合いを深めることが有効だと述べている。

②加藤（2014）は，社会参画意識を育成するために，社会的事象を自分事としてとらえやすい中学年の教材に着目して「価値判断」と「意思決定」の場面を学習指導計画に位置付けることで，その有効性を児童の日記や保護者のアンケートから示している。

（４）学習効果を高める振り返りやまとめ

和栗（2012）は，Moon（2004，A Handbook of Reflective and Experiential Learning：Theory and Practice，London：Routledge）の論から，学習における意図的な振り返りは，学びを促進するとともに学習行動自体にも影響をおよぼし，学びの当事者である意識を高めたり，メタ認知を促したりすると述べている。また，佐藤（2016）は，認知心理学の視点から，「わかったこと」「明日からの勉強にも使えそうなこと」など，振り返りの観点を教師が明示することの重要性を指摘し，具体的な観点として，①次に生かせるような具体的な振り返りがあること②良い教訓をクラス全体で共有すること③できるだけ多くの場面に生かせられる教訓を引き出すこと④失敗と成功の経験をペアにして考えること，の４点を示している（佐藤，2014）。そのような振り返りを継続的に続けることで，次に生かせる的確な振り返りの姿勢が育つとともに，学んだことが別の場面でも生かせるようになるとしている。

北（2012）は，学習の終末において習得・獲得した知識を生かす活動を展開する例として，これまでの生活や考えを振り返るといった「内省型」と，社会に対する自らの思いや願い，主張などを表明するといった「発信型」に分けている。その際留意する点として，国家・社会の一員としての自覚を持つこと，他者や人権の尊重すること，事実に基づいて考え判断すること，事象を多面的にとらえ，公正に見たり考えたりすること，と述べている。

４　実習校での実践（課題発見実習Ⅱ：平成２９年９月２５日～１０月６日）

（１）対象：中城村立N小学校４年 男子１５名 女子１２名　計２７名

（２）単元名：健康なくらしとまちづくり　「水はどこから」

（３）指導計画

社会科の「つかむ」「調べる」「まとめる」の学習過程に加えて，「関わる」段階を新たに設定した。単元を構想する際に工夫したのは以下の３点である。

まず，１つめの「つかむ」段階で具体物や資料を使い，「あれっ？」「なんでだろう」と子ども自身から問いが生まれるような導入を試みたことである。実際の水道水と川の水を比較させることで，学習意欲を喚起し，疑問や調べてみたいとの思いが高まるように工夫した。

２つめは「調べる・まとめる」の学習過程で社会的事象を調べる際に，資料を用いながら仲間と協力して知識・概念を獲得できるように指導形態の工夫を図った。また，教科書でイメージするのが難しい浄水場やダムの仕組み等については，ＩＣＴを活用して電子教材を用いながら視覚化するといった手立てを講じた。

表１　　単元計画

学習過程	時数	指導計画（学習目標・内容）	◆実生活とのつながりを意識した指導の工夫
つかむ	1	浄水場の水（水道水）と川から汲んだ水の２つを比べて興味関心を高め、学習課題を立てる。	身近な水道水と川の水を比べることで思考のズレを生み出す。
	2	水が送られてくるまでの経路や水の使用量の変遷を資料をもとに読み取ることができる。	実際に住んでいる地域の水の使用量を１Ｌペットボトルをもとに実感させる。
調べる・まとめる	3	資料をもとに浄水場の仕組みや役割を調べ、理解することができる。	身近にある蛇口やすぐそばの公園にある調整池と関連させながら、浄水場やダムについて調べさせる。
	4	ダムと森林のそれぞれの働きを理解し、水の使い方について考えを深める。	
	5	水を無駄にしないための工夫を自分事として考えられるようにする。	世界と日本の水の事情を比較することで当たり前に使っていた身近な水について考えを深めさせる。
	6	浄化センターの働きを知り、自分の地域とどうつながっているのか追究することができる。	普段使っている汚れた水について思考のズレを生ませ、追究意欲を高めさせる。
	7	昔の中筋村の人の水の手に入れ方や水道が引かれるまでの歴史について知る。	昔の人は水を大切にしてきたことを理解させ、今の自分の生活と比較させながら振り返らせる。
関わる	8	水を無駄遣いしないためのよびかけを考えることができる。	これまでの学びを自分の生活と結びつけて、考えることができるようにする。
	9	作品を交流し、節水に対するクラスの合言葉を作って具体的に取り組めるようにする。	これまでの学びを教室内外に活かせるように交流会を行う。
	10	これまでの学びを振り返り、単元のまとめの感想を書く。	

３つめは，新たに設定した「関わる」の学習過程で，学んだことが実生活へとつなげられるようにこれまでの学びを振り返り，節水に対する呼びかけの言葉を考え交流することで，教科書の世界から現実の世界へと知識が転化できるような取り組みを行った。その際，子どもの内側からの湧き出る「自分だったら」という考えや思いが醸成できるように，単元全体を通して振り返りを毎時間行い，ねらいを明確化しながら授業を進めた。

（４）指導の実際

下記は，第９時の終末の段階の授業記録であり，これまでの学びを振り返って全体交流している様子の一部分である。（Ｔ：教師，Ｃ：児童　傍線：筆者）

Ｔ　節水を呼びかける３人の言葉どれもすごくいい言葉だよね。みんながもっとこの言葉をいろんな人に広めたいんだけど，どうすればいいかな？
Ｃ　ポスターで知らせる。
Ｃ　国語の新聞を書いて知らせる。
Ｃ　**節水を呼び掛けるちら紙を配る。**
Ｃ　**校内放送で節水を呼び掛ける。**
Ｔ　いくつか出たんだけども，どれが明日からすぐにでもできそう？
Ｔ　こっち（ポスター）の声があったんだけど，これさあ，どこに貼る？
Ｃ　学校の掲示板。
Ｃ　**電信柱。**
Ｔ　あの，電信柱は学校にあるの？
Ｃ　**そういう意味じゃありません。校外に貼るのです。**
Ｔ　外は勝手には貼れないんですよ。実は法律があって。
Ｃ　**わかりますよ。市町村の人にお願いすれば。**
Ｃ　**学校のトイレ。**
Ｃ　一番いいところありますよ。自分たち教室の壁。
Ｔ　教室の壁，良いね。教室もできるね。
Ｔ　じゃあ，今言ってくれた場所に実際に貼れるかどうか先生が校長先生にお願いしてきますね。
Ｃ　**オッケー。じゃあ，おれも一緒に行く。**
Ｃ　**おれも行きたい，行きたいです。**
Ｔ　それじゃあ君たちだけ行ってくれるかな？
Ｃ　イェーイ

教師の「この言葉をいろんな人に広めたいんだけどどうすればいいかな。」の発問をきっかけに，子どもたちは「ポスターを作って貼る」「校内放送で知らせる」など，学んだことを「外の世界へ一歩広げて」考えられるようになった。また，実習中，女の子のＹさんが，自主的にペットボトルで濾過の実験をしたり，水槽の清掃をしながら水がきれいなる様子を観察したりしていた。

Ｙさんが実験している様子の写真(右：写真)と，単元終了後に書いた他の児童のまとめを紹介する。

私は，社会のじゅぎょうで感じたことは，水はとても大事だと感じました。なぜかというと，水があれば，植物はそだつし，水があれば，おふろやせんたくができるからです。
そして，節水の大切さがわかりました。節水を世界のみんながやったら，かんきょうもよくなると思います。
だけど，たぶんむりです。なぜなら，私たちも，このじゅぎょうをならうまでは，節水なんてやってなかったし，子どもを育てるお母さんも節水をしてたら大変だからです。
でも，このじゅぎょうをならったからには，節水はやりつづけたいです。（中略）
最後に，これからは，節水を心がけて（本気）家族にもいって，平和が続くような村・町・日本！になるようにしたいです。【Ｓさん】

（５）成果と課題

数名の児童がふり返りや感想では，「声をかけたい」「いろんな人に広めたい」「節水を心がけて家族に伝えたい」等の記述が数多く見られ，実生活とのつながりに関連付けて記述している割合が 27 名中 16 名と半数を超えていた。また，Ｙさんのように自ら進んで実験・観察したり，数名の児童が授業後に校長室に向かい，校内に節水を呼び掛けるポスターを貼る許可を得るために交渉しに行ったりしたということは，身近な問題を自分事としてとらえ，教室の学びを実生活へ生かそうとする力，つまり，社会に参画する資質・能力の基礎が培われているのではないかと推察できる。

今後の取り組みとして単元や学期を通した継続的な振り返りシートを活用しながら授業記録を分析することで，児童一人一人の変容を具体的に見取れるようにしていきたい。

５　今後の研究計画

（１）年間を見通した単元構想および授業づくり
（２）継続的な振り返りシートの作成および社会科の効果的なまとめについての研究
（３）社会科教育の理論研究と先行実践の分析・検討

参考文献

板垣英一(2007)「社会に主体的に参画する力を育む社会科学習の展開」『福井大学教育実践研究』第 32 号 pp. 127-138
－－－－(2008)「社会に主体的に参画する力を育む社会科学習の展開：小学校６年『戦争と人々のくらし』の実践より」『福井大学教育実践研究』第 33 号 pp. 65 76
－－－－(2009)「工場の学習を題材とした社会科学習の展開：小学校３年「工場の仕事」の実践から」『福井大学教育実践研究』第 34 号ｐｐ．31－42
唐木清志・西村公孝・藤原孝章（2010）『社会参画と社会科教育の創造』学文社，ｐ24
加藤薫(2014)「小学校中学年社会科における社会参画意識の育成：価値判断や意思決定する場面を位置付けた授業づくりを通して」神奈川県立総合教育センター長期研究員研究報告
北俊夫(2012)『なぜ子どもに社会科を学ばせるのか』文溪堂ｐｐ．44－50
北俊夫・向山行雄(2014)『新・社会科需要研究の進め方ハンドブック』明治図書ｐｐ．83－88
佐藤浩一(2014)『学習支援のツボ：認知心理学者が教室で考えたこと』北大路書房ｐ96
－－－－(2016)「小学校算数科における『説明』と『振り返り』：認知心理学からの検討」群馬大学教育実践研究別刷，第 33 号　ｐｐ．133－147
和栗百恵(2010)「『ふりかえり』と学習：大学教育におけるふりかえり支援のために」国立政策研究所紀要　第 139 集